さくらの置き土産

今からもう１３年前のことです。
当時自分はうつ病からの病み上がりで、殆ど感情というものをなくしておりました。
奥さんと別れ、一人暮らしを始めて一年程立った１２月の２４日、さくらは奇妙なクリスマスプレゼントとして、元の奥さんの家からわが家にやってきました。
お金はかかるし、面倒を見るのも大変だし、余裕のある旦那さんに見てもらうのが筋よと友達に言われた奥さんは、自分に相談してきました。
いい加減言い争いには懲り懲りしていましたので、押しつけあいをするのも疎ましく、黙って引き受けることにしたのです。
しかし、その当時、さくらは既に癌にかかっておりました。そのことは知っていました。
さくらは、来た当初、本当に癌なの？と言うくらい元気で、会社に行く前の朝４時、丘陵地帯のかなり寒い空気の中の散歩も嬉々として楽しんでいました。人懐こいわんこで、通りを一緒に散歩していると、向うから人がやってくると、誰彼かまわず、路上にコロンと仰向きになって、お腹を見せ、掻いてよ、とばかりに無防備全開！宅配便のお兄さんが来れば、全く初対面なのに、とびかかってじゃれつく始末。本当に人懐こいわんこでした。
しかし、４月になると、さくらは、急速に弱っていきました。
散歩のスピードがおそくなりました。癌細胞が増殖しているらしくお腹が膨らんできました。そうして、ついには、玄関の上がり框（かまち）も一人で上がることが出来なくなったのです。
さくらは、動けなくなってしまいました。息が荒くなり、昼と言わず夜と言わず、苦しそうに息をしています。こちらも、そんな息を聞くと、夜も眠れず、ほとんど一晩中、さくらのお腹をさすってやる日が何日も続きました。辛いとも苦しいとも、一言も言わないさくら。その無言さが、痛みを訴える言葉よりも何層倍にもなってこころに突き刺さりました。会社に行っていても気が気ではありません。
そうして６月２４日の深夜、いつもは僕の書机の脚元で苦しい息をしながらうずくまっているのですが、突然よろよろと、這うように歩きだして、扉の方に向かったとおもったら、

僕のほうを振り向き、諦めたような悲しそうな眼をして

「おとうさん、お世話になりました。楽しかった。でも、今日でお別れです。さようなら」

と言ったのです。はっきりと。

僕は慌てて、さくらを抱きしめ、タクシー会社に電話をして、かかりつけの動物病院に駆け込みました。

さくらは、早速酸素テントにいれられて、口には呼吸を助けるためのチューブが入れられました。

「しばらく様子を見ますから、一旦お帰りください」

と獣医さんに言われて、家に戻ってすぐ

「容体が変わりました」

と電話があり、返す踵（きびす）で病院に向かいました。

「もう、手がありません」

獣医さんはおっしゃいました。自分は、先生の言う前に

「安楽死させてやってください」

とお願いしました。

呼吸用のチューブが抜かれると、自力呼吸がもはやできなくなっているさくらは、間もなくこの世を去りました。

途端、それまでの感情を亡くしていた自分とは全くの別人に成り代わり、まるで堰を切ったかのように人目もはばからず大声をあげて泣き崩れました。

悲しくて、悲しくて、いとおしくて、かわいそうで。

家に連れて帰って、小さな棺に入れられたさくらの亡骸に目をやりました。

そうして、おもったのです。

さくらは、じぶんのいのちと引き換えにうつ病で感情をなくしていた自分に、感情を、ひとのこころを置いていった。

１２月２４日に来てから、丁度きっかり半年目の事でした。

それ以来自分は、身体がどんなに傷だらけになっても、人生がどんなにつぎはぎだらけであっても、そして、それらを取り換えることも消すこともできなくても、捨てるのだけは止めにしようと思うようになったのです。

だって、さくらが命と引き換えに置いていってくれた「大切な置き土産」なのですから。